

## 交通と疫病

立川 昭二\*

本来、風土病として発生した多くの疫病を、発源地から遠く離れた地に伝播させるのは交通である。歴史に記述をとどめているような、広域にわたる疫病流行の裏には、常に、歴史の進展に伴う文明の拡張、文明間の交流(交通)があった。

本稿では、現在までの歴史の中で、特に猛威をふるったいくつかの疫病をとりあげ、その伝播・流行の経路が、その時代の交通の経路と重なりあうことを論ずる。さらに、迅速な交通手段の発達した現代は、一方で新たな疫病流行の可能性をはらんでいることを示唆する。

## The Correlation of Traffic and Epidemics

Shoji TATSUKAWA\*

It is the traffic which transmits vernacular diseases from its original source to far away lands. Wide-spread outbreaks of epidemics recorded in history are the inevitable results of the development of civilization and interchange (traffic) among different civilization. The author takes up some of the worst epidemics in the past and shows how the channel of epidemics and that of traffic always overlapped. The paper suggests that today when the means of transportation are highly developed, there always are a danger of outbreak of wide-spread epidemics.

## はじめに——寝耳にコレラ

今年(1977)の6月、和歌山県の有田市で突如コレラが発生、ときならぬコレラ騒ぎが同市はもとより全国にさまざまな波紋をなげた。ある新聞は、「寝耳にコレラ」という見出しで、このニュースを報じた。それは文明国日本にとってまさに寝耳に飛びこんできた事件であった。

さっそく感染ルートが問題にされた。フィリッピン墓参団という説がいわれたが、確定するにいたらなかった。

日本の完備された防疫体制をもってしても、コレラは侵入してきた。そしてその侵入ルートは日本の高度の情報体制をもってしても解明できなかった。文明人の裏をかくコレラ菌の巧妙さに驚くとともに、じつは文明の象徴である高度に発達した交通機関が、コレラ菌に加担していたことを、あらためておもしろ知らされたのである。

以下、交通と疫病とのコリレーションという問題について、歴史という射程で考えなおしてみたい。そこに、文明のコースと疫病のコースとが同一軌道をえがいていたことを確認し、交通と疫病とはけっして終わることのない因果に結ばれているという事実を、あらためておもしろをめぐらしてみたいのである。

\*北里大学教授  
professor, Kitasato Univ.  
原稿受理 昭和52年6月30日

## 1. 古代交通と痘瘡

日本の古代史をもし注意ぶかく読むならば、欽明天皇13年(552)から用明天皇2年(589)にかけて、突如疫病の記録が『日本書紀』をにぎわしていることに気づく。

時代はまさに、仏教伝来という歴史の転換期、そして古代豪族の権力闘争の激動期——。疫病はこの渦中で重要な一役をこなっていたのである。そして、この疫病は、『書紀』の「瘡<sup>かさ</sup>発<sup>はつ</sup>て身<sup>み</sup>焼<sup>や</sup>かれ、打<sup>う</sup>たれ、摧<sup>くだ</sup>かかるが如し」という表現、つまり瘡<sup>かさ</sup>を<sup>そう</sup>発し、発熱し、非常な苦痛をとまなうという症状から察すると、あるいは痘瘡(天然痘)ではなかったかと推定される。もとより、こうした記録だけから病名を診断することは不可能で、痘瘡とならんで麻疹ということも考えられ、またこの両者は古代にはしばしば混同されていた。

ところで、仏教は552年あるいは538年のいわゆる公伝にさきだつて、大陸方面からの渡来者群によって6世紀以前に、すでにその伝来ははじまっていたとみられる。疫病も、これとおなじように、大陸からの渡来者群によって、仏教公伝以前に侵入していたにちがいない。

外来文化の渡来・移植は、ひとつの流行現象のようなもので、すでに隣国で馴染まれていたもの、あるいはすでに渡来者(帰化人)によって徐々にしみ

こんでいたものがひろがっていったものにほかならない。こうした外来文化の伝来現象とおなじように、疫病もそうした人びとのながい交流をとおして流行していったとおもわれる。

日本人つまり日本列島で歴史をつくってきた人びとは、そもそもの初めにさかのほれば、すべて外来者だといっている。したがって、日本人の病気も、それぞれの渡来者の原住地にあった病気が渡来したものと考えられる。日本列島は、古くはアジアの、近代では世界の、あらゆる文化の吹きだまりのような土地である。それだけに、日本には、あらゆる土地の疾病が吹きよせられてきた。

さかのぼって石器時代の日本人がどこから来たかという問題はしばらく措くとして、歴史時代に入った日本人が、他の文化圏と交流した最初のルートが、朝鮮半島を経由するものであったことは、疑う余地はない。

歴史年表を一見すればわかるように、4～5世紀は日朝の交流はきわめて活発であった。彼我の往来をとおし、当然疫病も活発に交流したにちがいない。その外来疫病のなかで、おそらく主役を演じたのは痘瘡であり、それは仏教伝来と前後して流行状態をつくったのである。

ところで、痘瘡の発源地はインドとされている。それが古代民族の移動・交流につれ、おそらくインドから仏教が各地に伝播していった経路とほぼおなじルートをたどって、世界各地に伝播していったのである (Fig. 1)。

中国で最初に痘瘡を記録した医書『肘後方』(葛洪の原著、陶弘景の増補)には、「頭や顔に発疹がでて、軀中にひろがり、致命率が高く、治ったものは瘡痕をのこす病気が流行し、それは建武年間に河南の南陽で北魏と交戦中に伝染し、「虜瘡」と呼んでいた」と記されている。この虜瘡はいずれの研究者も痘瘡としている—この建武という年号は、さいきんの研究では、南斉の建武2年(495)とされる—。

おそらく、これ以前にも痘瘡の流入はあったであろうが、この頃匈奴の移動にともない、インドから西域の天山南北路を経由し、中国の西北地方に侵入、さらに西から東へと移動し、中国内部では北から南へとひろがっていったとおもわれる。

この北中国に入った痘瘡が、新羅に仏教が伝来した528年前後、遼東半島を横切って北朝鮮へ、あるいは山東地方から黄海を渡って中部朝鮮へ伝わり、半島全域で流行し、ついで南朝鮮から対島・老岐を経て、日本の西陲の地へ流入したと考えられる。

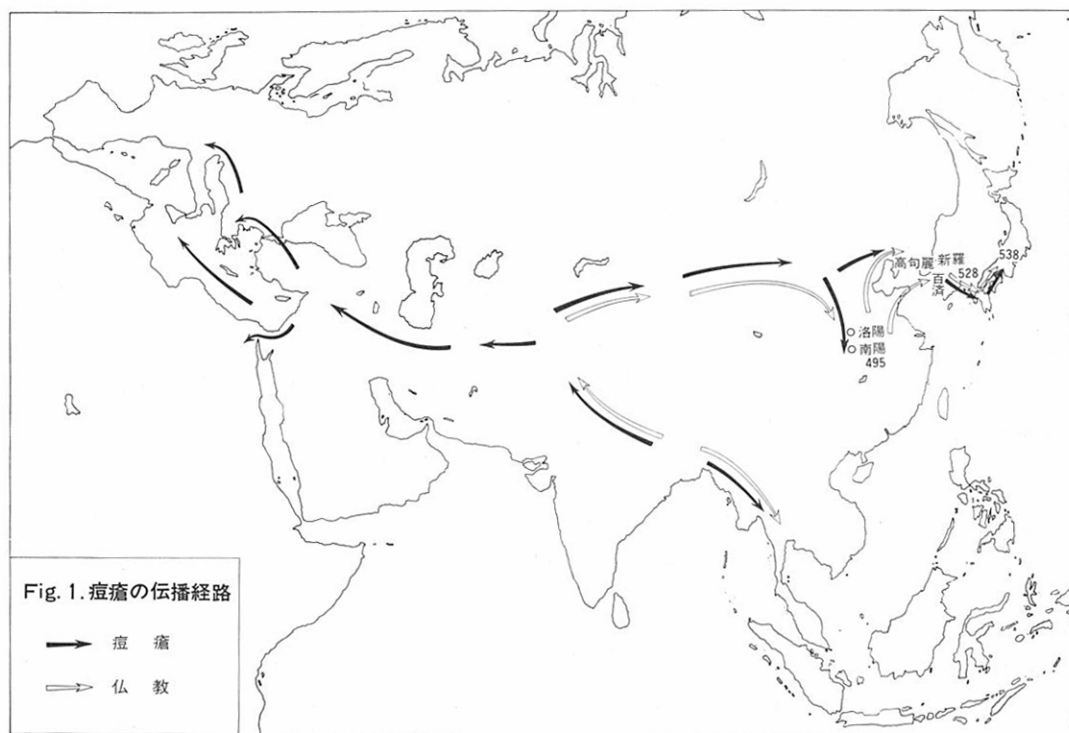


Fig. 1 Dissemination routes of "Smallpox"

こうして、痘瘡は、あたかも外来宗教であった仏教が日本の土着宗教となったように、もともと外来疫病であったのが日本の風土病的な疫病となったのである。

欽明・敏達期以降しばらく痘瘡の流行らしい記事を見なかったが、聖武天皇の天平年間、痘瘡と推定される疫病の大流行をみる。

『続日本紀』は、「天平7年(735)夏、大宰府管内に痘瘡が大いに発る。冬にいたるまで、この豌豆瘡、俗に装瘡という疫病で、多数の死者が出た」と記す。この翌春、阿倍継麻呂を大使とする遣新羅使の一行は、その往復の途次、痘瘡に罹患し、大使は病死、同勢100人は40人に減ったという。

翌天平9年(737)春、ふたたび大宰府管内に痘瘡が暴発し、畿内におよび、光明皇后の兄の藤原四兄弟、橘諸兄の弟橘佐為らが相ついでこの疫病で没死。6月1日は、「百宮の官人、疫を患う」という事態でついに廃朝(休日)。「続日本紀」はこの年の記事のさいごを「是の年の春、痘瘡おおいに起こる。はじめ筑紫より来れり。夏を経て秋に涉り、公卿以下、天下の百姓、あい継ぎて没死するもの、あげて計うべからず。近代よりこのかた、いまだこれ有らざるなり」と結んでいる。

ここに、この疫病が新羅から九州を経由したことを証言するべつの記録がある。たとえば『大同類聚方』には「痘瘡初めは、聖武天皇の御宇より起り、釣者が蕃人に遇い、この病を継ぐ」、また『壺囊鈔』には「此の病、新羅国より来れり、其始を云わば、筑紫の人、魚売りける船、難風に会ひて、彼国に着きけり、其人うつり病みて来れり」とある。

こうした記録からもあきらかなように、痘瘡は朝鮮ルートで日本に到達した。そして、それは渡来者によるほか、彼地に進出した日本人自身が持帰ったものであることも考えに入れなければならないのである。

## 2. 中世交易路とペスト

痘瘡がひとわり地上の各地を荒しまわり、それぞれの地域に居坐ったあと、世界の疫病史にその名をとどめた主役といえ、いうまでもなくペストである。

ペストは急性伝染病のなかでも最も危険なものといわれるが、生態学的にみるときわめて興味ぶかい病気である。まずペストは、本来ヒトの病気ではない。歴史にのこる大流行も、じつは齧歯類とりわけ

ネズミとノミとペスト菌との三角関係に、ヒトがまきこまれた結果なのである。ペストの病原体であるペスト菌はノミを宿主とし、このノミ、とくにケオプスネズミノミが寄生するネズミなどの齧歯類が、ペストという病気の本来の保菌者であった。

したがってネズミの病気であるペストの歴史は、ネズミの生態の歴史と密接な関係がある。ペストのヨーロッパへの想定される侵入経路をみると、じつはクマネズミのそれと経路も年代も一致する。このクマネズミはもともとインドからアジア南部にかけて生息している野ネズミである。それがしだいに北上をはじめ、アフガニスタン・イランからカスピ海沿岸へと進み、さらに西進して13世紀のなかばにヨーロッパに侵入している。そしてこれ以後、ヨーロッパにおけるペスト大流行がはじまっているのである。

では、この保菌ネズミの移動はどうしておこったのか。気候の変化つまり異常気象、それによる飢饉あるいは食物連鎖の変動など、自然界の因子がまず考えられる。つぎに人間界の因子、つまり人間自身がつくっていく文明そのものもある。13世紀といえ、東西交流の盛期に相当する。西からは十字軍が東方へ、東から蒙古が西進する。一説には、クマネズミはチンギス汗のあとを追ってヨーロッパに侵入したともいわれる。

ヨーロッパも当時やはり気候の落ち込んだ時期で、かなりの飢饉を経験している。しかしアジアの飢饉はそれを上回る壊滅的なものであったのだろう。ともかく、遊牧民とおなじようにネズミも西進の道を取り、一挙にヨーロッパを襲い、その余波は中国から東方へはついに伝わらなかった。

このペスト・ロードはどうたどれるか。

まず原発地については二説ある。ひとつは中国大陸南部、もうひとつは中央アジア、当時、中国は征服民族である元朝の時代であったが、1320-30年代に恐ろしい天変地異が続発、そこに激甚な疫病がおそい、無慮500万人が死んだといわれ、医史学者ヘッケルはこれをペストと推定している。そして当時、中国・インド・中央アジア・西アジア・中近東を結ぶ主要路は、交易往来のもっとも頻繁な時代でもあった。南中国にもしペストが初発したなら、そのルートにのって着実に伝播がおこるはずである。

一方、ペストの原発地は中央アジア、とりわけ南ロシアであるという説もさいきんでは有力で、この説によれば、ここからむしろ中国へ伝播し、一方西

進した一軍はクリミア半島の Caffa から黒海をへてコンスタンティノープルに達したという。そのほかダットン人が中国からペストをもらい、またインドが原発地だという説もある。生態学者パーネットはヴォルガ・ドン河地域に住むネズミに発病したペストが、ダットン人によって捕虜になったイタリア人にとりつき、それが1347年イタリア人がジェノアに帰還したさい、その船によって運ばれてきたという。

いずれにしろペストは、コレラ・チフスなどの伝染病とおなじように、あらゆる物質が各地から集散するバザール(市)が中近東の名物であるように、中近東という「病気のバザール」にひとまず集まり、そして散じた。こうして東西の門戸であるコンスタンティノープルにペストが侵入してきたのは、すくなくとも1347年。その年のうちにキプロス・エーゲ海・イオニア海の島々・シシリー島のメッシナ・コルシカ・マジョルカなど西地中海の島々に到着。さらにイタリア半島の西岸沿いに北上し、ジェノアに上陸。ここから二手にわかれ、ひとつはアルプスを越えてヨーロッパ内陸に入りこみ、他のひとつはそのままだ中海を西にマルセイユに上陸する。

Fig. 2 は、ヨーロッパにペストが侵入したさいの伝播状況を示すもので、やはり交通路にそって到達

月日が進行していることが、はっきりとわかる。

翌1348年、ローヌ・ソヌ川にそって北上したペストは1月にアヴィニオンに発生し、4月にはイタリアのフィレンツェに、つづいて5月スペイン・ドイツを洗い、8月にはイングランドに上陸、ロンドンに達し、こうして黒死病の幕は切って落とされた。そして翌1349年にはスウェーデン・ポーランドを襲い、はるかアイスランド・グリーンランドにまで波及し、1351年にはロシアに達する。そして、1353年ごろようやくその第1回の峠をこす。

ともかく、ペストは当時の東西交易路・地中海貿易路をそのままどっている。キャラバンの幌あるいは商船の船底にこっそりと無賃乗船してやってきたネズミたち、そのネズミたちにこれまた無断寄生しているノミの血液中に、ヨーロッパ人を恐怖のどん底につきおとし、文明を荒廃させたあの目に見えない元凶がよもやひそんでいようとは、だれひとり気づかなかつたのである。

### 3. 大航海時代と梅毒

ところで、ペスト禍をまぬがれた日本も、ついにまぬがれることができなかったのが、つぎの疫病の大立物、性病の王者梅毒である。そして、この忌わ

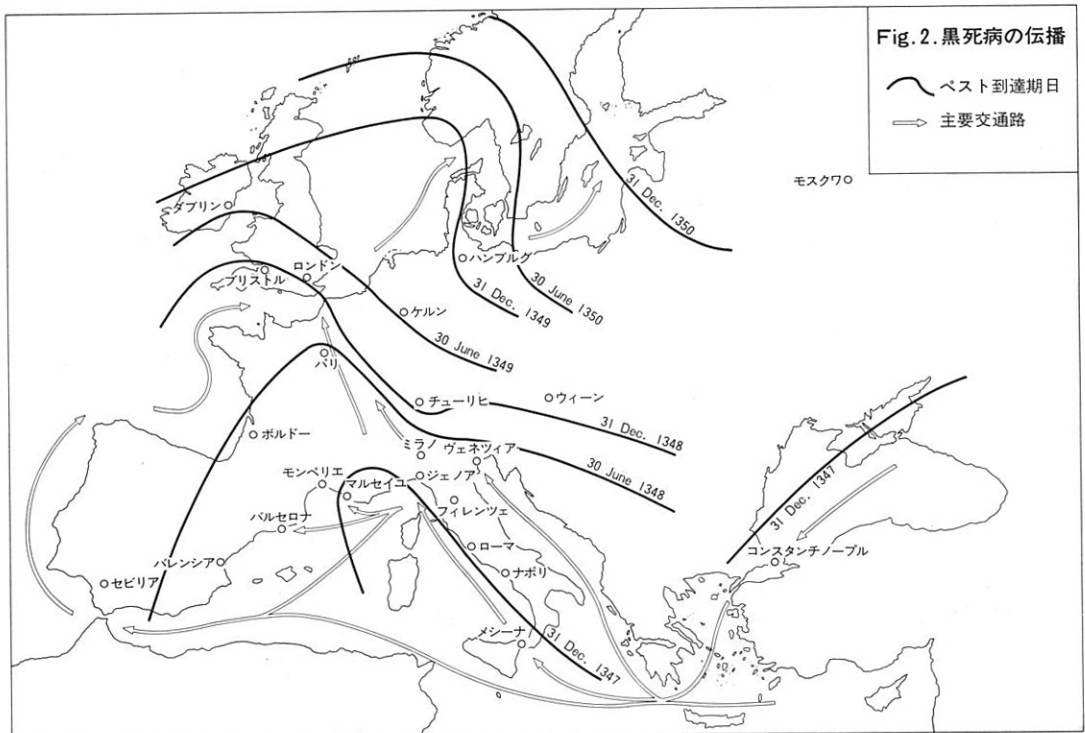


Fig. 2 Dissemination routes of "The black plague"

しい病気が文明世界に登場したのは、ヨーロッパにルネサンスという妖気のたちこめる15世紀末のことであった。

1493年5月、晴れの凱旋をしたコロンブスは、パロセロナでイサベラ女王に謁見していた。そのさなか、かれの水夫たちをとおして、新しい疫病が、パロセロナ全市にひろがった（新大陸の原住民との接触によって感染した病原体スピロヘータ・パリダとは、もとより当時だれひとり知るよしもなかった）。そして、翌1494年、フランス王シャルル8世がイタリア遠征軍を編成し、各国から傭兵を募ったとき、そのなかにこのコロンブスの航海土産をもたらしたスペイン人がたくさんいた。その結果、フランス軍がイタリアに進駐した1495年、イタリアでこれが暴発、イタリア人はこれをフランス病、フランス人はこれをナポリ病といい合った。これが、梅毒という性病の王者がヨーロッパに登場した劇的な幕明けである。

この凶悪な病原菌は、戦争につきものの売春婦をとおし、またたく間にひろがった。ある部隊はこのため全滅し、驚いたシャルルは急ぎ攻略を放棄、這這の態でフランスに逃げ帰った。遠征軍が解散すると、フランス・スイス・ドイツ・ポーランドなどに帰還兵がちらばり、梅毒スピロヘータは一挙にヨー

ロッパ全域にばらまかれた。シャルル自身、この不名誉な病原菌に冒され、1498年28才で死亡した。

ときあたかも大航海時代——。ヨーロッパ内陸に急速にひろがったように、梅毒はこの波ののって海をこえ、ひじょうな速度で東方に波及してきた。まず、インド西航路を発見したヴァスコ・ダ・ガマの隊員がカリカットに上陸した1498年前後インドにはこぼれた。つづいてマレー半島に波及、今日の石油とおなじようにマラッカ海峡をへて、1505年頃広東に侵入、1510年頃には中国内陸に波及した。中国ではこれを広東瘡あるいは楊梅瘡と呼んだ。

ところで、日本における梅毒の最古の記録は、富士川游『日本医学史』(明治37年)および土肥慶蔵『世界梅毒史』(大正10年)によると、永正9年(1512)といわれる。

とすれば、広東に発生してから10年以内に日本の畿内に出現、翌年は関東にまで波及している。京都から関東までが1年とすれば、西国にはおそらく永正8年(1511)頃には侵入していたと推定される。また永正5年(1508)のある医書には、淋疾・便毒等の記載はあっても梅毒とおぼしき疾病についての記載がないから、これ以前には梅毒は存在しなかったと考えられる。

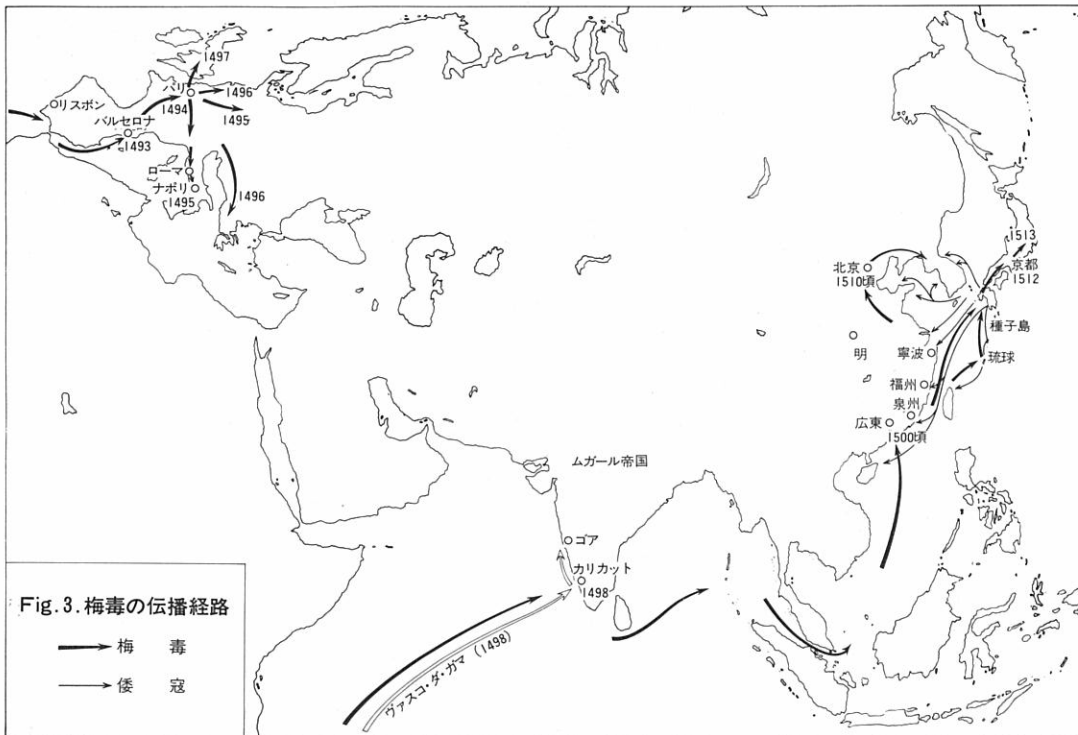


Fig. 3 Dissemination routes of "Syphilis"

日本で、この新しい疫病が唐瘡・琉球瘡と呼ばれたことは、梅毒が中国（広東）と琉球から輸入されたことを示唆する。琉球ではこれを南蛮瘡なんばんかさと称しているから、梅毒は南方から直接琉球に輸入されたかと推定される。一方、朝鮮には中国からおそらく1515年頃陸路流入したものと考えられる。したがって梅毒は、痘瘡とちがって、南方ルートをとっていたことになる（Fig. 3）。

それでは、この梅毒スピロヘータを海上はるか運んだのは誰れか——。じつはこれは、ポルトガル人でも朝鮮人でもない。倭寇と呼ばれる日本人を主体とする海賊集団であった。とくに三浦さんぼの乱（1510年）以後、中国人や朝鮮人をふくんだ一大海上活動者として華南から南海にわたって明の沿海を荒しまわり、とくに中国南部をはげしく侵したいわゆる後期倭寇——、彼らがじつは梅毒運搬の張本人であった。

奈良時代につづいて、日本の歴史における二番目の発展期、日本人のエネルギーが海外にまで発散する躍動期、人が動き物が動く、そのたかまるうごきの波にのって、海外に進出した日本人が海外の港々でみずからの体内にこの凶悪な病毒を受け入れ、つきつぎとりレーし、いわば海外旅行のおもわぬ土産ものとして故国へ持ち帰ってきた。上陸地点は九州の長崎か坊ノ津、あるいは堺と考えられる。

ときあたかも戦国乱世の動乱期、急変する政治や生活のうごきにのり、この新しい侵入者はたちまち日本人の男女貴賤をはげしく冒していった。戦国の勇将にも、この病魔におそわれた人物が多いが、たとえば家康の第二子結城秀康も、梅毒のため鼻が落ち、ついに落命した。

さて、日本が最初に西洋文明に接したのは小学生でも知っている天文12年（1543）ポルトガル人の種子島漂着による鉄砲伝来。そして6年後の天文18年（1549）ザビエルの鹿児島上陸によって西洋思想たるキリスト教が伝来する。

ところが——、梅毒の伝来あるいは上陸はそれより30年もはやい！ じつに、コロンブス帰航後20年、ヴァスコ・ダ・ガマのインド上陸よりわずか14年のことである。18世紀の大思想家ヴォルテールは、その名作『カンディード』（1759）のなかで、くわしく梅毒にふれているが、その一節で「2、3世紀もすれば中国人や日本人にもお鉢がまわってくる」というていたが、事実は詩人の想像力をはるかにこえて、まことに超スピードであった。

極東の日本に西方の文物としてはじめて伝来した

のは鉄砲であり、西方の思想としてはじめて伝来したのはキリスト教であることはまちがいないが、それに一歩さきがけ西方の文化のひとつともいえる梅毒を日本人はいち早く受入れていたのである……。

#### 4. 「近代化」とコレラ

さて、18世紀頃までの鎖国日本を侵していた疫病は、痘瘡、梅毒それに麻疹・インフルエンザ・肺結核などであった。ところが、19世紀も後半に入り幕藩体制が揺らぎ、世界資本主義の波におされ開国をせまられた幕末期、日本の第3の変改期ともいえる時期に登場してきたのがコレラである。

コレラはいうまでもなく国際伝染病の花形である。しかしペストや発疹チフス・痘瘡や結核のように、歴史にながく名前を記憶された古顔ではない。それは19世紀になってはじめて、国際舞台におどり出たニューフェイスである。それまで彼女は、母国インドにひっそりと身をかくしていた。

コレラは元来インドのガンジス河流域とくに下ベンガル地域に盤踞していた風土病的性格をもった伝染病であった。それが19世紀、近代文明の進歩とりわけ交通の活発化とともに、国際交流の波に乗って、文明諸国にお目見えしたのである。つまり、コレラの世界的流行は、いうなれば世界の「近代化」の一現象といえる。19世紀初頭から20世紀初頭にかけての約100年間、コレラはその故郷から数回にわたって飛び出す。そして近代化をいそぐ世界中の人びとに手ひどい打撃をくりかえし与え、ペストの脅威をようやく忘れかけた文明人をふたたび伝染病の恐怖に震え上がらせたのである。

とくに、イギリスのインド経営および東南アジア進出が、コレラ・パンデミーの引金になったことは、否定できない事実といえる。コレラ史の運命の年、1817年は、あたかもイギリスがインド支配に着々と成果をあげた第3マラータ戦争の年でもあった。コレラ・パンデミーはイギリスの極東進出とみごとに対応している。

コレラの第1次パンデミー（1817—1823年）は、つぎのようにたどれる（Fig. 4）。1815—17年インドは凶作による飢饉がつづいた。それが原因であったのか、1817年、生まれ故郷のベンガルで蠢動をつづけていたコレラは俄然身をひるがえし、8月はじめカルカッタを襲った。翌1818年には北進してネパールに侵入、ガンジス河を遡ってアグラ・デリを通過、1820年にパンジャブに到達、西進してスラット・ボ

ンベイに向い、南下した一軍はマドラス・マズラを通過、1818年12月にセイロンに渡り、翌年コロンボに波及する。

さらに1821年海を渡ってアラビア半島のオーマンにとりつき、バーレイン諸島からペルシア湾東岸のブシールを経て、シラズ・テヘランに達し、ペルシキ湾頭のバスラにも出現する。そこからチグリス河に沿って、バクダットに入り、ユーフラテス河を遡江、1822年にはカスピ海と黒海の間トビリシに至り、アストラカンにまで達する。また隊商路によりシリアにもちこまれたコレラは1822年11月アレppoに、翌年アレキサンドレッタにあらわれ、ここで進路をはばまれ、ヨーロッパを指呼の間にのぞみながら、ついに入ることができなかった。

一方、東進したコレラは1819年にビルマ・シャムに入り、梅毒のときと同じように、海路マラッカ・ペナン・シンガポールを洗い、翌年バンコックに上陸する。同年にはジャワ・ボルネオその他インドネシア諸島にも渡り、フィリピンのマニラもすでに感染する。

そして1820年中に海から広東に上陸、ついで寧波から揚子江をさかのぼり、翌年には華北が流行の波にのまれ、北京に入る。さらに余力をかけて万里の長城を越え、はるかロシア領キャフタに達する。

この余波が1822年（文政5年）、日本に及ぶ。三木栄氏によると、朝鮮を経由して下関に上陸したといわれる。日本最初のコレラ流行である。

つづいて、下ベンガルの故郷で3年ほど雌伏していたコレラは、1826年ふたたび勢をもちかえし、第2次パンデミー（1826-1837年）となり、いよいよ世界制覇の途に上る。この年ガンジス河をさかのぼり、翌年にはパンジャブ、1829年にはアフガニスタンからペルシアに入る。ここからメソポタミアを経て、1830年アラビアに入り、翌年メッカの巡礼に大流行をおこして12,000人を殺し、エジプトではカイロ・テーベ・アレキサンドリアを通過、チュニジアに及ぶ。

一方、ペルシアから北進してロシア領ウズベクに侵入したコレラは、そのブカラから隊商にのってヨーロッパロシアのオーレンブルグにとりついた。ここでついにロシアの防疫の網をくぐり抜け、1830年モスクワに到達、さらにペラルスブルグを洗い、フィンランド・ポーランドへと進撃する。勢をえた一軍は南下してオーストリアに侵入、1831年ウィーンを陥れ、別軍はバルト海をまわってプロシアのダンチヒに上陸、内陸に進攻、同年ベルリン・ハンブルグに入城する。

また、軍艦に乗りこんだのか、1831年10月コレラ

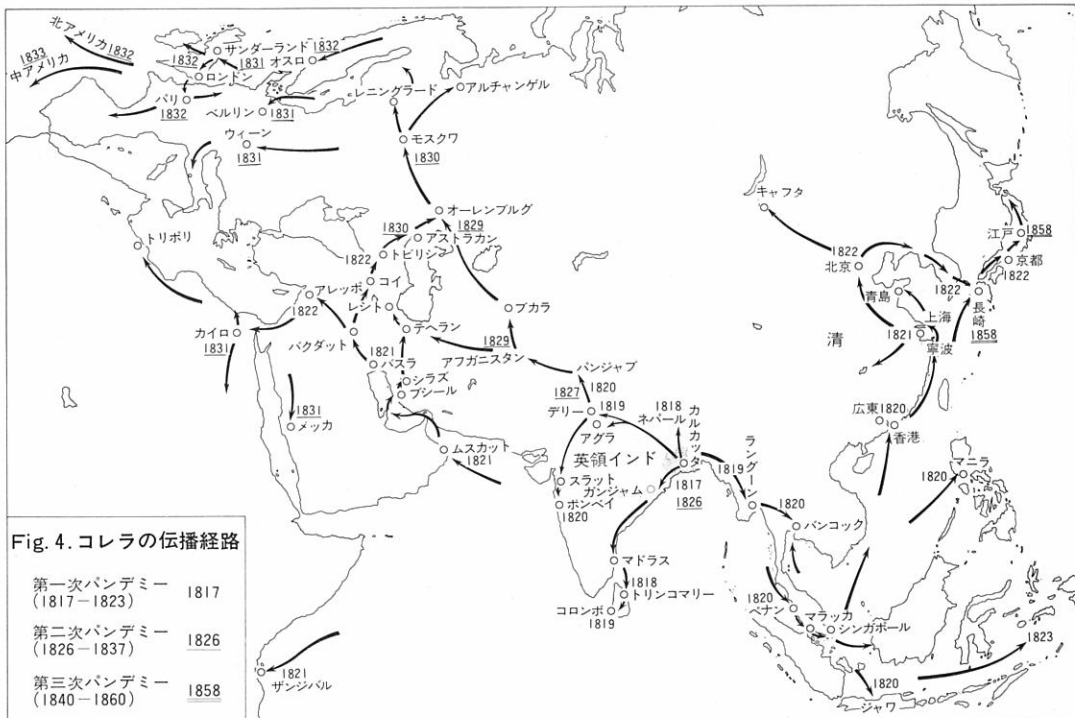


Fig. 4 Dissemination routes of "Cholera"

は突如イギリス東海岸サンダーランドにあらわれ、ニューキャッスル・エジンバラにつづいて、1832年2月ロンドンに出現、同年3月アイルランドのダブリンを侵す。同じころドーバー海峡対岸のカレーに姿を見せたコレラは、ただちにパリに出現、フランス全土にひろがる。この年にはベルギー・オランダ・ノルウェイなどの主要都市はいずれも同じ運命となる。

ところが余勢をかったコレラはこの1832年、勇躍大西洋をのりこえ新興国アメリカに渡る。まずケベックに上陸、内陸カナダに進み、ほとんど同時にニューヨーク・フィラデルフィアに出現する。さらに1834年にはロッキー山脈を越えて太平洋岸にまで到達する。また1833年にはメキシコ・キューバが洗礼され、1837年には中米のニカラグア・グアテマラを襲っている。東方では1835年に中国に侵入、広東で流行を再発させた。しかし日本には侵入してこない。

このように第2次のパンデミーは処女地のヨーロッパ・アメリカを席卷、かくして1817年からの第1次のそれとかさねると、この20年間にコレラは地球上のほとんど全域にその足跡を残したことになる。おそらくこれまでに、これほど短い期間にこれほど広く世界旅行をした生物は、ほかにいないだろう。

ところで、日本が最初にコレラに見舞われたのは文政5年(1822)、第1次パンデミーの余波で、ベンガルのハイマートを巣立ってから5年後のことである。朝鮮からか、南方からか、ともかく西南の一角にいまだかつてみない暴病が伝来し、大阪では「三日コロリ」と呼んだ。山陽道から大阪に入り、京都に波及、伊勢路・東海道にも進んだが、箱根を越えなかった。

これから数えて36年後、安政5年(1858)第3次パンデミーの余波が達し、日本における第2次流行となり、3年間惨劇を展開した。病勢は激甚をきわめ、九州・四国から大阪・京都・江戸から遠く箱館(函館)にまで及び、多数の死者を出した。江戸だけでも死者10万余、あるいは26万余人を数えたという。安政5年といえは、幕府がようやく開港にふみきり、また「安政の大獄」などの事件があいついでいたときだけに、コレラが朝野に与えた衝撃は深刻であった。

つづく第3次のコレラ流行は文久2年(1862)。この夏、患者56万余、江戸だけで73,000の死者が出たという。こうして時代は明治維新を迎える。

そして明治日本はまた、コレラをはじめ痘瘡・赤

痢・腸チフス・ペストなどの急性伝染病が、文明開化の潮にのり、大波となってこの列島を呑みつくしたのである。

## 5. 20世紀とインフルエンザ

コレラなどにたいし、細菌学が勝利の行進をつづけ「疫病の時代は去った」といわれているとき、その熱狂に冷水をあびせたのは、第一次世界大戦末期に発生して全世界を震撼させたインフルエンザ(流行性感冒)のパンデミーである。

流感はギリシア時代から知られた伝染病であり、多くの人びとがこれにかかった経験をもち、しかもその十中八、九が軽症ですんでいる。ところが、「スペインかぜ」として知られる1918-19年の大流行は、かつての黒死病惨禍を想起させるような大きな災厄をもたらした。

初発患者は1918年4月、第一次世界大戦のフランス戦線に発生した。この流行の第1波はたちまち連合軍の間にひろがり、軍隊の移動にともない、アメリカ・イギリス・ドイツ・イタリアへ伝染した。同じ時期に、インド・ニュージーランド・南アフリカにも流行がみられた。その後2カ月の合間において、流行の第2波が到来し、それは世界中の軍隊や市民を襲い、地球上の住民の約半数が罹患したという。さいごの第3波は翌年の冬におこり、これまで免れていた地域を襲い、多くの人命を奪った。その伝染力はきわめて強く、潜伏期もひじょうに短く、ある日たった1人の患者しかいなかった連隊で、翌日は数百人の患者が発生するというほどであった。とくに20-40歳代の働きざかりの人びとに重症者が多く、肺炎の合併症が死亡のおもな原因であった。

全世界でこの「スペインかぜ」によって、2,500-5,000万の死者を算したという(バーネット)。日本でも罹患患者2,300万、死者38万余という、これまでにない惨禍をもたらした。大戦の死者をはるかにしのぐ伝染病の猛威をまえに、「疫病の時代は未だ去っていない」と疫学者をして嘆じさせた。

つづいて記憶に新しいのは、1957-58年の「アジアかぜ」のパンデミーである。中国に原発したそれは、地球上の全域を侵し、日本でも人口の半数が罹患したといわれるが、幸いにも多数の人命を奪うということにはなかった。しかしこの「アジアかぜ」の伝播速度は、「スペインかぜ」のそれよりはるかに速かった。「アジアかぜ」ウイルスは、1957年2月から11月までの10カ月で世界を一周した(Fig. 5)。そ



れはいうまでもなく現代人の移動の頻繁さと迅速さに起因している。密集した集団生活・満員の交通機関・迅速な航空輸送、こうした現代の社会環境が、世界中の人びとをほとんど同時に侵襲するインフルエンザの爆発的な性格をつくったのである。

なお、江戸時代後期、つまり18世紀後半から19世紀前半にかけての日本では、古書で風邪・風疫・感冒などと呼ばれたインフルエンザの大流行をたびたび記録している。そうした記録のなかで、医師多紀元堅は『時還読我書』(天保8年)で、天保3年(1832)の流行にふれて、つぎのような興味ぶかい数字を伝える。

十月中旬より霜月上旬まで、都下感冒大に行れ、免るもの殆少し。之を東西に訪るに、西国は九月下旬より始まり、奥羽は霜月下旬に行れたり。綿互六千余里の地僅に二月に満ずして衆人同病にかからざるはなし。邪も亦靈怪なるかな。

もともとインフルエンザはその流行の広域性と迅速性を特徴としているが、この記録から、当時のインフルエンザの伝播速度が算出できる。つまり、西国(京阪)から江戸(東京)の間(およそ550km)が9月下旬から10月中旬(およそ20日)とすると、

日速27kmとなる。東海道江戸大阪間は徒歩で平均15日、インフルエンザの伝播速度はこの徒歩の速度にほぼ近い。そして江戸から奥羽(青森)の間(およそ750km)が10月中旬から11月下旬(およそ40日)というから日速18kmとなる。京阪江戸間の伝播速度が江戸奥羽間のおよそ1.5倍のスピードであったことは、当時の交通事情を裏書きするものといえよう。ともかく、6,000余里(1,300km)をわずか2カ月(60日)、平均日速21kmというスピードで、日本国中の衆人が同病に罹患するという事態をまねき、「邪も亦靈怪なるかな」と嘆かしたのである。

そして、インフルエンザの発生・伝播の経路をみると、ほとんどの流行がまず長崎に発生し、つづいて中国から上方を経て関東に到り、さらに奥羽へと東進している。風疫がつねに西よりおこり東へと及ぶことは、医師の本間玄調なども指摘しているが、それは長崎が当時唯一の外国に開かれた門戸であったからであり、インフルエンザが舶来の伝染病であったことを裏書きするものである。

はやり風、十七屋から引きはじめ

明和期の川柳である。「十七屋」とは江戸は日本橋、瀬戸物町にあった飛脚問屋。上方から東海道筋へと伝染してきた風邪は、江戸では当時のターミナル、飛脚問屋からはやりはじめた。インフルエンザの流行経路のパターンは、いつの世も変わらない――。

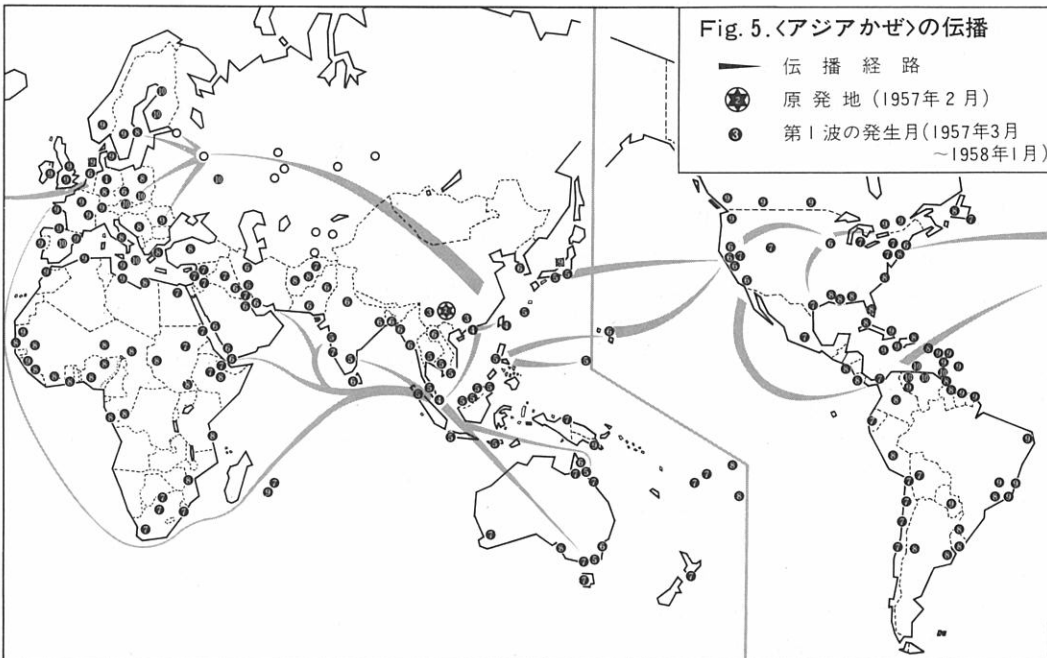


Fig. 5 Dissemination routes of "Asian'flu"

## おわりに——ジェット機時代と疫病

昨年(1976)の3月、ちょっとした伝染病騒ぎがあった。ラサ熱(ラッサ熱)という新型の熱病にかかった患者と、同じ飛行機に乗り合わせた帰国者が5人もいた。一時は色めき立ったが、全員シロということで、事なきをえた。もし発病者がいたら——、猛烈な伝染力、死亡率50%、そして血清はアメリカに3人分しかないという。背すじの寒くなるおもいである。

ことのおこりは1969年1月、西アフリカのナイジェリア奥地の部落ラサにある伝道所の病院、そこでひとりの看護婦が突然原因不明の熱病にたおれる。町の病院に送られ、ここで2人の看護婦に感染、このうち2人は死亡、1人はアメリカに空輸される。ただちにコロンビア大学・エール大学・アトランタ疫病対策センターといった最前線の学者たちが、治療と原因究明に乗り出す。空輸患者は奇跡的に回復したものの、実験に従事していた微生物学者が発病、病院内感染の危険があまりに高いため、エール大学ではついに研究を一時中止、新聞も大きく報道し、アメリカに社会的な恐怖をまきおこした。

ラサ熱の第2波の流行では、現地の病院関係者に感染が続発、その半数が死亡した。たとえば現地病院の女医が、ラサ熱で死亡した同僚の死体解剖のとき、過労からメスで指を傷つけて感染、ついに犠牲者となる。

私たち文明人は、疫病の時代は去ったと信じ、それは遠い後進地域の話でしかないと思いこんでいる。しかし、その遠い疫病の発原地から、保菌者が潜伏期のうちに国内に入りこんでくるジェット機時代の今日、文明人もじつは疫病との突発的接触の恐怖にさらされている。

文明人を疫病と異常接近させているのは、もっとも文明化された交通機関の航空機そのものなのである。